



『網干地区』をたずねて

網干町は、明治22年(1889)興浜・余子浜・大江島・浜田・新在家村が合併し、町制施行後、昭和17年旭陽村と合併して、昭和21年姫路市に合併するまで続いた。合併後は網干区と呼ばれる。

「網干(あばし)」の名の起こりは、『網干町史』に宮内の魚吹八幡神社の由来により、養老4年(720)放生会の式日、殺生を禁じ氏子の漁師は網を干して社参したので網干祭といい、近郷を網干と称したことによるとある。記録に見える網干は、鎌倉時代の文治2年(1186)源頼朝書状に「播磨国網干渡」とあるのが、初出であろう(『角川地名辞典』)。しかし、周辺の縄文・弥生時代の遺跡や条理遺構、『播磨国風土記』の「宇須伎津」などから、古くから開発の進んだ地で、江戸時代には、姫路藩領から龍野藩領さらに丸亀・龍野・幕府領に分かれるなど複雑な様相を示した。古社・古寺も多く、歴史文化の香り豊かな地域と言える。以下、網干の文化財を紹介するが、魚吹八幡神社周辺については、シリーズ13及び26を参照してほしい。



『播州名所巡覧図絵』より龍門寺

龍門寺(浜田) 盤珪禪師が丸亀藩主京極家の保護と網干の豪商佐々木家の援助を受け、寛文元年(1661)に再興した寺。盤珪禪師は浜田に生まれ、17歳で出家。全国を修養し、難解な禅をやさしく説き多くの信者を得た。彼の教えは「不生禅」といわれる。20棟余りの堂宇の建ち並ぶ播磨屈指の禅宗寺院である。明和元年(1764)一度火災に遭っているが、それ以前の建物も多くあり17棟が市指定文化財である。堂内には県指定の千手観音立像、木造聖観音立像、木造釈迦如来坐像や市指定の盤珪国師関係資料・大方丈襖絵がある。

境内裏手には、龍門寺を経済的に支えた佐々木家の墓や不徹寺を開いた貞閑尼(田捨女)の墓もある。毎年4月の第一日曜日とその前日におこなわれる大茶碗の振舞茶の行事も有名。

西芝引込線の鉄道跡 太平洋戦争当時、国鉄網干駅より浜田地区の軍需工場に鉄道が敷かれていた。戦後も鉄道は残り民営となっていたが、現在は廃線となり部分的に残る線路敷が昔の面影をとどめるのみである。右の写真は、近年の中川護岸改修工事で消失する前の盛土跡の状況。



西芝引込線の鉄道の盛土跡(現在は消失)

「**盤珪国師誕生の地**」の碑(浜田) 龍門寺の東方、義徳院の境内に延享元年(1744)に建立されたもの。義徳院は、盤珪禪師の母が開基したもので、庭内の古井戸は盤珪産湯の井戸といわれている。

不徹寺(浜田) 龍門寺の南東にある。元禄元年(1688)に丹波柏原生まれの田捨女(貞閑尼)が開いた寺。捨女は6才の時「雪の朝 二の字二の字の 下駄のあと」の俳句で有名。夫の死後、仏門に入り貞閑と名を変え、盤珪禪師の徳を慕い網干に来て、多くの弟子を教え導いた。元禄11年(1698)66歳で入寂。



「盤珪国師誕生の地」の碑

金刀比羅神社（興浜）大己貴命ほか数神を祀る。御神燈は天保14年（1843）のもの。水盤に讃岐の地名や船の名や船主名が刻まれている。

大覚寺（興浜）古くは余子浜村古網干にあった釈迦堂が始まり。天福元年（1233）に真言宗の光接寺となったが、天文3年（1534）に浦上氏と宇喜多氏の争いの兵火に罹り焼失。弘治2年（1556）に現在地に移り大覚寺と改め、浄土宗になったという。境内は広くもとは多くの塔頭があった。寺宝の絹本著色釈迦三尊像と絹本著色十六羅漢像の絵画は重要文化財。県指定の絹本著色当麻曼荼羅図や市指定の絹本著色地藏菩薩像、孔雀文磬、木造毘沙門天立像もある。本堂前には正徳2年（1712）の年号と瓦師の名を刻んだ大鬼瓦が置かれている。本堂左手の経堂の石段には天保4年（1833）の紀年銘がある。

境橋（興浜・新在家）江戸時代には、脇坂家（龍野藩）と京極家（丸亀藩）の藩境でもあり、興浜と新在家の境となっていた掘割に架かっていた石橋である。道路拡幅のため掘割は無くなり、橋は取り外されたが、慶応元年（1865）の紀年銘のある橋材は、道路脇に保存されている。

船渡八幡神社（余子浜）神功皇后にまつわる伝承をもつ神楽岡にある。境内には、宝暦9年（1759）と文化4年（1807）の御神燈や、安政4年（1857）と文久2年（1862）の年号を刻んだ玉垣があり、本殿右手には力石が残る。

擲秀碑（けっしゅうひ）（余子浜）船渡八幡神社北側の加藤家住宅前にある。水車業者が同組合頭取の徳を頌して、明治32年（1899）に建設したもので、題字は勝海舟の書である。

法専寺の鬼瓦（余子浜）本堂が建て替えられ、鬼瓦が保存してある。宝暦9年（1759）の年号と瓦師の名がある。

善慶寺（新在家）明応元年（1492）の開基と伝わる。江戸中期に火災に遭い、本堂は正徳2年（1712）の再建という。本堂前には、安永10年（1781）の年号と鶴の瓦師の名を刻んだ鬼瓦がある。本堂裏墓地入口には、2m程の高さの花崗岩製の阿弥陀坐像と並んで、享保7年（1722）の年号のある三界萬霊塔があり、墓地には河野東馬の墓や織部灯籠もある。

永念寺の石造物（新在家）水盤に文化14年（1817）、井戸枠に弘化4年（1847）の年号がある。

ダイセルの異人館（新在家）明治42年（1909）日本セルロイド人造絹糸株式会社（ダイセル化学工業）の工場の操業に当たり、技術指導として、イギリス人ジェームス・クリーンをはじめドイツ人らの技師が来住したのに伴い、その宿舎として、翌年工場地の一角に住宅地を設け、洋風住宅を建てた。現存するのは2棟のみで、会社の迎賓施設と図書館に利用されている。図書館の内部は、ほとんど当時のままである。



釈迦三尊像(部分)



十六羅漢像(一部)



境橋



擲秀碑



善慶寺の鬼瓦



河野東馬の墓



ダイセルの異人館

龍野藩の藩邸跡（新在家）網干小学校の校地の北半分は江戸時代に、龍野藩の藩邸があったところで、御茶屋と呼ばれ、藩主もしばしば訪れたようである。校庭の東端部に当時の井戸枠が保存されているほかは、藩邸に関連した遺構は残っていない。

龍野藩の舟運と蔵屋敷跡（新在家）揖保川から分かれた網干川を通じて、龍野藩の物資が運ばれた。網干川の川沿いにかつては蔵が並んでおり蔵屋敷の風情を残していた。そのうちの一棟には、最近まで右の写真のように脇坂家の家紋のある軒丸瓦が葺かれていた。新在家には、江戸時代後期、龍野藩の地場産醤油を扱う船庄屋近藤家や船問屋が数軒（福地屋六郎兵衛、福地屋文蔵、福地屋多市郎、真砂屋九郎左衛門など）あった。

播電網干港駅跡 明治42年（1909）に龍野電気鉄道が網干（現JR網干駅北口）と龍野間で営業を開始し、チンチン電車として親しまれた。同年中に網干港まで延長され、東雲橋の北側に網干港駅があった。その後鉄道は経営者も名称も次々と変わり、のちに播電と呼ばれていたが、昭和9年に廃業申請をし、電車は姿を消した。右の地図は昭和初年頃のもので、新在家の北から余子浜・津の宮に続く線路が記されている。

誠塾〔稲香村舎〕（新在家）林田藩の儒学者河野鉄兜（生家は余子浜の垣内）の弟東馬が慶応4年（1868）に設立した私塾。始め稲香村舎と呼んだが、明治22年（1889）に誠塾と改めた。東馬は、勤皇の志士として元治元年（1864）に蛤御門の変に参加、敗れて出石藩に捕らわれたのち、網干に帰り医業の傍ら子弟の教育に当たった。始め多くの子弟が学んだが、学制の発布などで生徒数が減少し、明治45年（1912）に東馬の死と共に休業。戦後再開されたが、昭和38年閉塾した。その後、修復され、現在類例のない貴重な江戸期の私塾の建物として市指定文化財となっている。

大江島の地蔵（大江島）かつて揖保川分流の一つであったとみられる古川が大江島の中を流れる。この川に架かる旧街道の大江橋のすぐ北側に地蔵堂がある。地蔵坐像の台石には「大乘妙典 三界萬靈」の文字と文化13年（1816）の年号と建立者の名前がある。

大江神社（大江島）稲荷・恵美須・武大・春日・金刀比羅の各神社が合祀され、明治45年（1912）に現在の名称となった。玉垣には、文久2年（1862）の年号が刻まれている。

加藤家住宅（余子浜）加藤家は江戸時代に蔵元で廻船業を営み、屋号を成田屋と称した。西側の揖保川を船で遡り、龍野で小麦・醤油・薪を仕入れ、大阪に運び、大阪の物資を龍野に運んでいたとされる。一方で醤油業も営み、明治～大正期に最盛期を迎えた。平成21年1月に主屋ほか7件が国の登録文化財となった。

■編集 糸田恒雄（姫路市文化財嘱託調査員）
姫路市教育委員会文化財課



龍野藩の藩邸跡の井戸枠



脇坂家の家紋が残る倉庫（現存しない）



播電の姿



播電軌道図



誠塾（稲香村舎）



大江島の地蔵



加藤家住宅